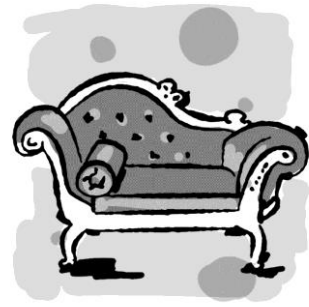


十月のテーマ

疾病信号



え・城谷俊也

病気は厄介者か 生涯の友か

純

粹倫理では、人の心の状態が人間生活の様々なところに

に影響を及ぼすことから、肉体に起こった病気であっても、心の不自然さを知らせる信号であると捉えます。病気を厄介者とするのではなく、自らの誤りを教えてくれるものと受け止めていこうと説いています。

入社3年目を迎えたNさんは、数カ月前から下痢に悩まされてきました。最初は特に気に留めていませんでしたが、次第に出血が見られるようになったため、病院で診察を受けると、「潰瘍性大腸炎」という病気であることが判明しました。

二度の入院後、外来での治療を続けることになったものの、繰り返し下痢と腹痛に襲われる間に、体力は磨り減り、仕事へのモチベーションは下がる一方でした。

自らの境遇を嘆き、日増しにこの病気をさえないなければ、こんなことには……という気持ちが強くなっていたNさん。暗い思いに沈んでいた時、最初入院した

時に見舞ってくれた上司の言葉をもっと思い出したのです。

「病気と敵対するのではなく、一生付き合う友だと思つて、愛和の心で対すること」

この言葉をもう一度心に刻み、
「病気と敵対せずに、自らの病気と向き合おう」と決意しました。

その日からNさんは、風呂に入ると、「今日もお疲れ様。ありがとうございました」と、自らの体に挨拶をするようになりました。また、痛みを感じた時には、「ずいぶんと元気に騒ぐね。もう少し静かにしておくれ」と、声をかけながらお腹をさするようにしました。

そうした言葉をかけ続けているうちに、自らの病気を嫌がる心は少しずつ消えていきました。

そして、仕事や家庭生活において、周囲と調和しようという心が欠けている時に痛みを感じやすいことに気づいたのでした。自らの体験を通して、体の痛みはこうした心の不自然さを教えてくれているのだ」と思えるようになったのでした。

それから1年が過ぎました。Nさんは、今でもお腹の痛みを感じることがあります。そのたびに「きつと何か大切なことを教えてくれているのだな」と、自身の心や行ないを見直し、生活の改善に役立っています。

*

病気になると、誰しも不快な痛みや不安に直面し、その苦痛から逃げたくなるものです。

また、自身の辛さのみならず、生活の様々な面に支障を来したり、周囲にも迷惑をかけてしまうことから、「嫌なもの」と受け止めてしまうのは当たり前のことでしょう。

しかし、病気の片面だけを見るのではなく、この病気がなぜ自分の身に起こったのか、もう一つ奥にある原因を心静かに見つめ直してみましよう。

決して悲観することなく、病気の見えない一面を見るつもりで仲良くつき合おうと、自分に必要なことを教えてくれていることに気づくことができるのです。